



羅針盤

石井 則久
Noribisa Ishii

国立感染症研究所ハンセン病研究センター センター長



温故知新——皮膚結核

日本の新規皮膚結核症例は年間 100 例程度と言われている。しかし、学会発表、雑誌発表されている例は多くない。皮膚結核の特集を組むことは多難で、本誌のように臨床写真の提示には難儀する。

皮膚科の世界では感染症、とくに細菌感染症、さらに抗酸菌症に興味を持ち、研究をしている皮膚科医は絶滅危惧種に分類されるであろう。しかし、多くの先輩は「分からない病気」の時に考えるべきは梅毒、サルコイドーシスなどとともに、必ずハンセン病と皮膚結核があると言う。この中で肺結核を含めた新規結核患者は 22,681 人 (結核罹患率: 17.7/10 万人), 死亡者は 2,166 人 (2011 年) と多く、先進国の中での日本の現状は数十年遅れである。

皮膚結核は尋常性狼瘡 (lupus vulgaris) に代表されるが、この病名の由来はオオカミ (lupus = 狼) に食いちぎられてきたような慢性の潰瘍である。明治時代は皮膚科外来では梅毒、疥癬、ハンセン病などとともに、稀ならざる感染症で、癩痕面に癌を発症することもあった (狼瘡癌)。

さて、結核は結核患者から他のヒトへ結核菌が感染するヒト-ヒト感染である。皮膚結核の場合は、他の患者から皮膚への直接接種と、本人の結核病変から皮膚への連続的撒布 (直接浸潤)・血行性撒布・自己接種などが考えられる。その他、結核に免疫のある人が結核菌またはその代謝物に対して、アレルギー反応として皮膚病変を示す結核疹もある。

現在一番多い皮膚腺病 (scrofuloderma) は頸部リンパ節結核に続発することが多く、ヨーロッパ中世には少なくない病気であった。腺病質 (scrofulosis) は虚弱体質や体格繊弱・頸部リンパ節腫脹などを伴う体質を指し、結核がその原因ととれる。

コッホが 1882 年に結核菌を発見したが、最近の生物学的製剤は、眠っている結核菌を揺りおこす作用がある。TNF- α 阻害薬による皮下の皮膚結核 (metastatic tuberculous abscess: MTA) が散発している。一方、結核の検査では QFT-3G や ELISPOT などが使用されているが、皮膚結核診断への信頼性は未定で、今後のデータの集積が待たれる。

治療については、耐性菌などへの脅威から、皮膚結核においても肺結核と同じ治療が求められている。

皮膚結核を診るのは皮膚科医であるが、皮膚科医で結核に造詣の深い医師がいないと、内科医が皮膚結核を診る時代になるかもしれない (結核を診ることができる内科医も希少になったが)。

BCG に伴う副反応はすでに小児科医が診療しており、接種時期が生後 6 カ月未満 (多くが 3 カ月~5 カ月で接種) から、1 歳未満 (5 カ月~8 カ月未満を標準的な接種期間) と高年齢になったことから副反応は減少すると考えられる。

皮膚結核がわかる皮膚科医になるため、ぜひ本誌を読んで下さい。